

令和 5 年度

学校経営方針

京都市立向島秀蓮小中学校

I 教育理念と校訓

(開校時の教育理念と校訓が引き継がれることを祈り、ここに示す)

(1) 教育理念

【豊かな人間性を育み、人間力を高める】

向島秀蓮小中学校は、「未来を担う子どもたちのために新しい学校の創設を」との地域や保護者の願いのもと、9年間の学びと育ちのつながりを一つにした新しい施設一体型の「義務教育学校」である。

地域の人々の願いや協力によって支えられる本校教育においては、地域の人々と連携し、共に地域の子どもたちを育していくという使命感をもって、教育活動を地域全体で推進していくことが大切になる。義務教育学校として、新たに本校の教育が発展していくために、向島地域の歴史や取組、地域住民の学校への思いを受け継ぎ、家庭・地域社会との連携・協力により、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「**変える・変わる そして輝く**」のコンセプトのもとに「**学校が育つ 地域が育つ 人が育つ**」学校教育を推進していかなくてはならない。

社会に目を向けると、子どもたちが生き抜いていくこれからの中は、IoTや人工知能等の情報技術の進展やグローバル化といった変化が人間の予測を超えて急速に進展していくと言われている。未来を担う子どもたちが、こういった社会変化の中にあっても、高い志や意欲をもった自立した人間として自分と社会の豊かな未来を創造していく力を育むことが求められている。

本校の教育においても、10年後、20年後の社会情勢を鑑みながら、「意欲をもって自ら学び、考え、表現する力」を身に付けるための学びを軸としつつ、「一人一人の未来を拓く力」の育成を図つていかなくてはならない。また、社会がいかに目まぐるしく変化する時代になったとしても、生きていく上で大切にしたいことを、自らを律しつつ、他者と協働し、たくましく生きるという「人としての在り方」を実現させることを考えている。そのために、「誠実さ・謙虚さ・思いやり・感謝・純粋な心・挫折に負けない心」といった豊かな人間性を育むことを教育の柱とし、その人間性を持って、社会変化に対応できる「知・徳・体」のバランスのとれた人間力を高める教育を充実させていかなくてはならない。

最後に、義務教育学校として開校した本校では、9年間という今までにない長く連続した期間の中で、子どもたちの学びと育ちをつなげていくため、授業の質を高めることをねらいとした学習指導要領の改訂等教育改革の中で果たす役割は大きく、義務教育9年間を見通したカリキュラムの系統的な指導を実践し、心豊かで、学び続ける姿勢を持った人間の育成に寄与する。そして、どのように時代が変化しようとも一人一人が豊かに生き抜いていくために「豊かな人間性を育み、人間力を高める」という教育理念を掲げ、その理念を創造・実現させていくためには、本校教育に携わるすべての人が使命感と情熱を持ち続けていくことが大切になる。

(2) 校 訓

【「自立」「清心」「貢献】

自立：①主体的に学びに向かい、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができる人間の育成

②困難を乗り越えるたくましい心を持ち、他者と助け合いながら協働できる人間の育成

清心：①美しい蓮の花のように純粋で清らかな心を育み、誠実・謙虚で思いやりのある人間の育成

貢献：①地域や社会に向き合い関わり合い、自己実現を目指すとともに、社会のため人のために行動できる人間の育成

②「人とつながり、ともに学び、支え合う力」を高め、より良い自分、より良い社会の実現のため自ら考えて行動することができる人間の育成

II 教育目標とめざす姿

(1) 教育目標と資質能力

「他とつながる力」・「未来を拓く力」の育成

< 9年間で身につけたい資質・能力 >

- ・論理的に考える力 = ・主体的に課題について学び、根拠を筋道立てて考えることができる。
- ・発信する力 = ・相手にわかりやすく自分の考えを伝えることができる。
- ・コミュニケーション力 = ・考え方や立場の違いを理解し、自分の考えを論理的に話すなど表現することができる。
・相手の考え方を理解し、受け入れるなどして、相手とのつながりをさらに深めることができる。
- ・折れない力 = ・失敗を恐れず、たくましく挑戦し続けることができる。
- ・多様性を受容する力 = ・他者への思いやりの心を持ち、多様な人とのつながりを大切にし、共に生きていくことをすることができる。
- ・自律的活動力 = ・折り合う心を持ち、自らを律する力を身に付け、誠実かつ実直に行動できる。

学校教育目標を実現するために重点化した6つの資質・能力は、自立した社会人としての必要な基礎力でもあり、どのように時代が変化しようとも豊かに生き抜いていくために必要な力と考える。また、9年間を見通した「学びのつながり」「育ちのつながり」「人・地域とのつながり」の3つのつながりを核としたカリキュラムで学び、「学びを習得していくプロセス」や「学校教育全般の中においてひたむきに取り組む過程」の中で、結果として身に付くものとしてとらえる。目指すは社会性と主体性の育成である。

(2) 目指す学校像

向島秀蓮小中学校に対する地域・保護者そして生徒の期待感は大きい。反面全く新しいシステムの学校であり、学校に対する不安もある。生徒一人一人の良さが生かされ、一人一人の生徒に「居場所」があり、励まし合える仲間がいるなど「温かさ」を合言葉とした学校・学級づくりを通して生徒がいつも「通いたい」と思える学校の実現を目指し、地域・保護者の期待に答える「通わせたい、信頼のある学校」の実現が大切になる。

- ・一人一人が大切にされ、個性あふれる温かな学校
- ・「なりたい自分」と「確かな学び」をつなぐ学校
- ・家庭、地域とつながり、ともに育つ学校

(3) 目指す生徒像

目指す子ども像

卒業までに 実現させたい姿	ひたむきに 学び続ける姿	たくましく 誠実な姿	豊かに 生き合う姿
ビジョンステージ	ひたむきに学び続ける姿	たくましく誠実な姿	豊かに生き合う姿
チームステージ	協力し学び合う姿	挑戦し高め合う姿	豊かにかかわり合う姿
ベーシックステージ	いきいき学ぶ姿	やさしくすなおな姿	なかよくつながる姿

(4) 目指す学年像

- 1年 遊びが大好きな学年
*遊びから学ぶ。「遊び」の重要性を教職員が再認識
- 2年 友達が大好きな学年
*思いやりや多様性を受容する土台をこの学年で
- 3年 自分が大好きな学年
*自尊感情・自己存在感の獲得をこの学年で
- 4年 下級生を大切に思う学年
*ベーシックのリーダーとして。小学校では6年生がになる役割を担う
- 5年 自ら決めて学ぶことに挑む学年
*自分で課題を設定し、他者からの協力を得て深める学習への挑戦
- 6年 自らの体力向上に挑む学年
*健康への意識高揚を図り他と共に高まる経験をこの学年で
- 7年 地域貢献に挑む学年
*見せつけろ!チームステージのリーダーの力を
- 8年 利他に挑む学年
*利他の心により温かいつながりを獲得する経験を、そして学校全体のリーダーへの成長を図る
- 9年 なりたい自分、理想の未来に誠実に向き合う学年
*なりたい自分、理想の未来をイメージし、着実に歩みを進める学年

(5) 目指す教職員像

- ・生徒を一つの枠にはめようすることなく、「自分らしさを探究する過程」を支援することを大切にし、生徒の伴走者であろうとする教職員職員。
- ・学校教育が変革期にあることを理解し、自らが多様性を受容する力を身に付け、これまでの経験や組織文化そして学校文化にともなう概念から一線を画し、教科や担当の枠にとらわれない取組を実践する、「変える、変わる」を自らが体現する教職員。
- ・義務教育学校のスタイルを教育ツールとして捉え、本校の与えられた使命を常に意識し、情熱と使命感を持って生徒に向き合い、謙虚さをもって保護者や地域と関わることができる教職員。
- ・子どもにとって身近な大人であることを意識し、自らが主体的に学び続けようとする教職員。
- ・意欲と活気にあふれ、共に語り合い、仕事の厳しさを共有し、そして協力し助けあう。開校以来、全教職員で学校をつくってきたという誇りを継承し、これからも全教職員で学校を創りあげるという志を高くもつ教職員集団。

(5) 生徒・教職員共通スローガン

教育目標および目指す姿の実現に向け、生徒と教職員の共通のスローガンを次のように掲げる。

「探せ！あたらしい自分、あなたらしい生き方！」

～どこまでも果敢に挑戦、知らない自分に会いに行け！～

III 学校経営方針

地域の期待を背負ってたつ学校を経営することに誇りをもち、全教職員で教育目標と目指す姿の実現をめざすため、以下のように方針を示す。

- ・義務教育学校という新たな学校だからこそ実現できる新しい教育を全教職員で創造していく。
 - ・「学力向上」を根幹に据えて学校経営を進め、定期調査として小中一貫学習支援プログラムを用い、PDCA サイクルを回す。確認テストを教職員が喜び合う機会の一つとする。
 - ・個別最適な学びと社会につながる協働的な学びを往還させることを意図し、ICT を効果的に活用することに一体となって取り組む。
 - ・授業改善として、反転学習を効果的に取り入れ、探究活動や対話的な学習につなげる。単元構想を練ることにより、反転学習の内容や時期を決定するとともに、練られた単元構想を生徒に示すことで、単元の目標および各時の目標を見る化し、主体性を持たせる一助とする。
 - ・日々の授業と家庭学習との連動を通して、自学自習の習慣化を図るとともに、デジタルドリルや自学自習ノートの活用等を通じ、自分が必要とする学習課題を的確に選択して取り組む力の育成を目指す。
 - ・教育活動全般において探究的な活動や課題解決学習を軸にし、主体的に学ぶ姿の実現をめざす。また、課題解決に向け粘り強く取り組む活動を企図し、「折れない力」の育成を図る。
 - ・総括考查や評価を生徒の学習改善の機会ととらえ、主体性を高め、苦手を克服する勇気づけを行うためのものとして取り組む。
 - ・帯時間（チャレンジタイム）を、基礎学力を養う重要な時間ととらえ、朝読書等の取組の充実を図る。
 - ・英語によるコミュニケーション力の育成を英語科の枠を越えて取り組む。
-
- ・学校は失敗が許される場。学習者目線に立ち、生徒が自分らしい生き方を探求するための機会となりうる教育活動を展開する。
 - ・「人間性を高める」を実現し、「多様性を受容する力」を育成するために、人権教育や道徳教育を推進し、「いのち」の大切さや人権尊重の理念を正しく理解するとともに、「子どもの命を守りきる」教育活動を全教職員で進める。
 - ・SDGs の目標達成を視野に入れた教育活動を実践する。
 - ・人権教育の 4 つの視点（「人権としての教育」「人権を通した教育」「人権についての教育」「人権のための教育」）を意識し、様々な教育活動において人権教育を行う。
 - ・道徳教育を要とし、「考え方議論する道徳」の実践を通して、子どもたちの相互理解を深め、心豊かな人間を育成する。
 - ・こころ科での学習を通じて、人間性を高めることをねらう。
-
- ・学校教育目標の達成を視野に置いた予算の計画及び執行にあたる。
 - ・デジタルシティズンシップ教育を推進し、デジタル技術の利用を通じて社会に積極的に参画しようとする姿勢や態度を育成する。
 - ・地域の就学前施設と架け橋期の子どもの育ちへの願いを共有し、互いの教育・保育の接続が機能するよう取り組みを進める。
 - ・学校運営協議会を軸に保護者・地域との連携を密にし、協働しながら社会に開かれた教育を推進する。地域貢献が地域ともにある学校の果たすべき使命である。
 - ・学校だよりや HP、学校公開などを積極的に活用し、教育活動を地域、保護者に発信する。
 - ・校務の効率化、業務改善の視点をもって学校運営を行い、働き方改革を推進する。
 - ・アンケートや学校評価等を軸とした PDCA サイクルを確立させ、教育課題を明確にしながら改善を図っていく。

- ・「させる生徒指導」から「支える生徒指導へ」の転換を自分事として取り組む。
- ・「自尊感情」を高めることを中心に据えて教育活動を行う。「北風」ではなく「太陽」となる。
- ・正しい言動がとれる生徒の育成のため、対話をもとに一人一人の心に寄り添った丁寧な指導・支援を心がける。(生徒を理解しようとする教員の意欲的な姿勢が生徒・保護者的心を動かし、信頼関係の基礎となる。)
- ・教員からの説諭は短く、生徒への問いかけ・提案を重視し、生徒に内在する思いを引き出す指導を行う。
- ・「主体性」を高め、自律的活動力を育成する生徒会活動を推進する。
- ・生徒指導の4つの視点(自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成)に基づく学級経営・授業づくりを推進し、自己指導力を高める。

- ・睡眠に関わる取組を重点化する。
- ・本校で目指す「人間力」のすべての基盤は健やかな体と心の調和であり、日常的に生活習慣や体力の向上を目指した取組の充実を図る。
- ・給食の時間を「楽しく会食する時間」と位置づけ、他とつながる力の育成のための場として取り組む。
- ・給食の食材を生きた教材として食育を推進するとともに望ましい食習慣の確立をめざす。
- ・長期休業前を中心に、飲酒・喫煙・薬物に関する指導を充実させる

- ・全生徒を「できる存在」として捉えることをはじめとし、総合育成支援教育の視点から全教職員の理解と認識を深め、個々の課題を的確にとらえるとともに、行動面だけでなく、学習面への指導を充実させる。
- ・個別の指導計画等を利用し、個別に有効な教材や指導方法、ICTの活用等により、個に応じた適切な支援を行う。
- ・育成学級における生徒一人一人の個性・資質・能力を最大限に引き出し、学習や生活習慣の定着を図るとともに、自立した生活ができるように指導する。また、交流学級など連携を深め、児童生徒間の連帯感を高め、共生社会に向か、共に学び合う意識を育成する。
- ・普通学級の生徒に対しても、総合育成支援教育の視点にたち、CCQの実践等個に配慮した支援を集団への支援としても取り組む。(C:Calm、C:Close、Q:Quiet…「穏やかに、近くに寄って、静かに」)

IV 教育の特色と内容

一貫教育を「教育の手段」として捉え、以下に示す3つのつながりを意識し、積極的に活用する教育活動を実践する。

① 異学年のつながりを用いる

- ・同学年同志の活動では得られないものが得られる。
- ・実社会では、物事を異学年の人と協働して達成していく必要があり、異学年とつながる経験が大切となる。
- ・上記2つについては、年齢差が一定ある方が効果的であることが多い。
- ・横の繋がりでは、リーダーシップを発揮できない子も、縦においては発揮しやすい。また、その

経験が今後に生きてくることが多い。

・ピア活動・生徒会活動・部活動などを中心にした取組が考えられる。

*自尊感情を育てる有効的な手段である。

② 学びのつながりを用いる（小中学校の連携が強化されれば不可能ではないが…）

・9年間を見通した指導ができる。

　6年生をゴールとするのとは異なる結果が得られる。

　6年生までを知らずに教育活動を行うのとは異なる結果が得られる。

・9年卒業時を意識させる指導がしやすい（卒業時を意識して学ぶことができる）。

　さらにその先にも目を向けることが可能となる。

・教える経験をさせることができる（教えることが一番の学びであることを生かす）

③ 地域とのつながりを用いる

・保護者・教職員以外の大人（地域）に育ててもらう環境づくり。小学校までは地域との連携は進むが、中学校では進まなかつたこれまでの教育の結果を踏まえ、地域にも9年間で育ててもらうという風土を醸成する。

・比較的地域との連携が進んでいる小学校の視点から考えても、知るべき地域の範囲が広がり、それに伴って人とのつながりの範囲も広がる。ゆえに、教材や人材としての活用範囲も広がる。知ることにより、地域への愛着高揚もねらう。

・総合的な学習の時間を中心にして地域貢献（防災教育・ボランティア活動を含む）をテーマに学習活動を進める過程で、自身の住む地域

やそこに住む人々を知ることで「地域を誇りに思う気持ち」の醸成をねらう。

・京都市・そして向島地域が所有するところの「学校」の使命は地域貢献である。

（一般企業の使命が「社会貢献である」ことと同様。）